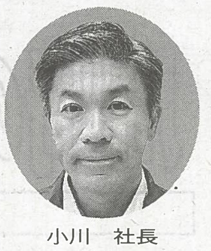
Bulls商品に注目集まる

売上高・動員ともに目標達成

関東ジャパン建材フェア

ジャパン建材（東京都、小川明範社長）は2月27日、Gメッセ群馬（群馬県高崎市）で「第2回関東ジャパン建材フェア」を行い、当日の来場者数は2032人、売上高は30億9300万円と動員、売り上げともに目標を達成した。



小川　社長

2回目の開催となる同展には、ジャパン建材の関東営業部8営業所（高崎、前橋、宇都宮、宇都宮資材、長野、松本、新潟、長岡）のほか、約80社の木材・建材、住設機器メーカーなどが出展した。

開会式に当たり小川社長は「AIの台頭が著しいなか、こうした展示会をあえて開くというのは、フェースツーフェースで顧客と会話し、心を通じ合わせるということに妙味があり、商売の根本がある。きょうたった1日しかないが、すべての顧客に満足いただけるよう、笑顔と心のこもった接客をお願いしたい。年度末のため、この展示会が出展各社の決算の最後の一助となるよう願っている」と話した。

Bulls商品ほか、多数の展示が注目を集めた

同フェアでは、同社のプライベートブランド「Bulls」の商品が多数出品された。同ブランドの「自然塗料i・ro（アイロ）」で塗装した、調湿・消臭効果に優れるキリ製の板材「桐々板」や、玄関などの限られたスペースでも座る場所を作り出せる収納椅子「OLISU（オルイス）」、耐震だけでなく制震にも効果的な耐力壁「Kダンパー」など、さまざまな商品が注目を集めた。

出展メーカー各社も新製品を数多く展示し、ノダ（東京都、野田励社長）はワイドデザインが特徴の複合フローリング「Lusso J-Base（ルッソJベース）」を出品したほか、ニチハ（名古屋市、吉岡成充社長）が羽目板のようなラインを入れて木目感を強調した軒天材「シダーグレイン」など、春の新製品を来場者にアピールした。

特設コーナーとして特価市場も設けられ、大建工業（大阪市、億田正則社長）が鏡面柄床材120坪分、木目調床材50坪分を販売し5分ほどで完売。その後出品すべてが完売するなど賑わいを見せた。

昨年末から桧製品が入荷半減

アカ松は20梱包超を提示

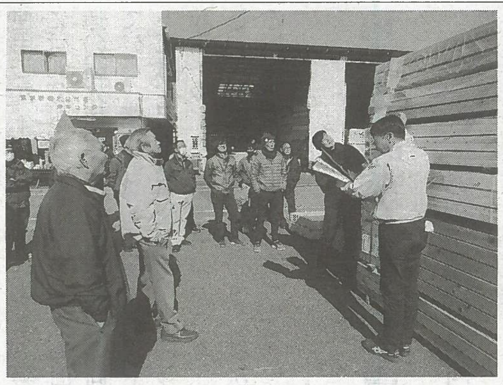
東京新宿木材市場・府中センター

東京新宿木材市場（東京都、中村司社長）は2月21日、府中センターで特売会を開き、50人の参加で5700万円を売り上げた。原木不足と同時に国産材への切り替えが進み、製材所の受注が増加している。昨年12月から同センターでも桧を中心に製品入荷が遅れだし、いまだ半減状態が続いている。そのため品物が間に合わなくなり対応に苦慮している。アカ松タルキの販売は堅調で、今回も20梱包超を提示した。

北関東では1月下旬から原木出材が多少回復したが、これまでが少なすぎた。ようやく製材所はひと月程度の在庫を持てたが、本来この時期は夏場まで使う寒伐り材を2～3カ月分は確保する。一部製材所は「一時より出材が増えたので買いやすくなり、今回の共販市で買えなくても次回買えるという余裕ができた。ただ寒伐り在庫がないため、手当ての数量は変わらない」と情勢を語る。そのため杉柱取りは多少値下がりしたが高値に張り付いたままで、桧丸太はむしろ強い状態を維持している。

同センターでは長らく都内向けのタルキや筋違で米松や米ツガが主流だった。ただ近年入荷が不安定になり、代替品ではなく普及品として北関東産桧への切り替えを進めてきたものの、今回の原木不足を背景にした製品供給減で同センターへの入荷が遅れ、仕入れコストも上昇基調にある。

今回、桧の90㍉角×4㍍KD特等は8万円前後（市場渡し、立方㍍）、同土台105㍉角KD特等は8万円前後、同柱KD特等は8万2000円前後で売った。同4㍍×45×90㍉KD特等は8万5000円前後だが、製材所の指し値は9万～9万5000円。同タルキ4㍍×45㍉角KD特等などは12万円前後で売った。



原木相場は高値に張り付いている

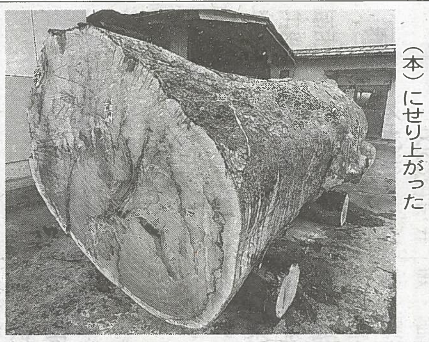
一方、ロシア産アカ松タルキの引き合いは横ばいで推移する。今回30×40㍉は、4㍍を14種類、3㍍を8種類を立ち会いで提示した。3㍍SP級は10万～10万5000円、4㍍S級を10万5000円前後、同上級品を12万～12万5000円で売った。

全般に引き合い堅調

年明けから出材増加

福島原木センター

福島原木センター（福島市、佐藤俊介社長）は2月21日、如月特別市を開き、20人弱の買い方が参加した。出材が伸び悩んだ昨年末までと比べ、杉や松類を中心に入荷量が増え、せり売りに1500立方㍍、入札分に300立方㍍が集まり、随契分700立方㍍と合わせて取扱量は計2500立方㍍に伸びた。隣接する宮城や山形が雪の影響で出材が増えてこないため、全般的に引き合いは強く、積極的に手当てされた。



150年生のケヤキ大径材が50万円（本）にせり上がった

広葉樹は人気のナラが50立方㍍とまとまった量で入荷し、活発に引き合った。また、ケヤキ150年生4㍍×116㌢が50万円（本）、クロガキ1・6㍍×32㌢が9万円（同）にせり上がった。

針葉樹はモミが200立方㍍と入荷が多く、4㍍×50㌢以上が1万1500～4000円（立方㍍）、4㍍×58㌢以上が1万5000～7000円（同）を中心に手当てされた。今シーズンは福島県内で全体的にアカ松の出材が少なく、そのなかで300立方㍍入荷したアカ松への引き合いは強く、4㍍中目が1万4000～5000円（同）、3㍍中目が1万3500～4000円（同）と例年に比べて好値が見られた。

昨秋から急上昇した杉一般材の相場は県内全体で一服したが、買い気は引き続き堅調で、3㍍の柱取りや中目は1万5000～5500円（同）と前年同月比一段高で手当てされた。桧一般材も引き合いは強く、4㍍24～28㌢が2万1000円（同）、4㍍×30～36㌢が2万5000円～8000円（同）が中心値となった。合板向けで入札に掛かった300立方㍍も、カラ松4㍍材が2万3000円（同）、杉4㍍材が1万1110円（同）などしっかりした地合いで完売した。

次回は3月21日に花見市を開催する。

18、19日

なにわ銘木大賞祭

大阪銘木協同組合

大阪銘木協同組合（吉本登志貴理事長）は18、19の両日、大阪銘木市場（大阪府摂津市）で「第19回なにわ銘木大賞祭」を開く。18日に針葉樹製品ほか天井、彫柱、天然丸太、19日に広葉樹製品の即売をそれぞれ実施する。

開市は18日が午前9時30分、19日が同9時。

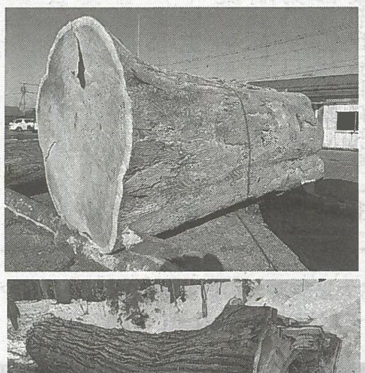
なお、今回の市では全商品対象に、お買い上げ賞として500円を進呈する。

ケヤキ・杉の高樹齢大径材出品

11、12日の長野県森連の市売りで

長野県森林組合連合会（長野市、藤原忠彦会長）は、11日の中信木材センター（同安曇野市）の市売りで推定樹齢300年のケヤキ、12日の北信木材センター（長野市）の市売りで同400年の杉の大径材を出品する。

中信木材センターに出品されるのは、推定樹齢300年、胸高直径200㌢のケヤキ大径材で、長さ4㍍×末口170㌢、同2・8㍍×112㌢、同1・6㍍×80㌢。山形村の民家にあった巨木が一部腐り、安全管理が難しくなったことから伐採された。



上からケヤキ4㍍×170㌢の元玉（中信木材センター）、杉6㍍×110㌢（北信木材センター）

北信木材センターに出品されるのは、飯山市で伐採された樹齢400年、胸高直径140㌢の杉大径材で、長さ6㍍×末口110㌢。笹杢が出ており、希少価値が高いと見ている。

そのほか、カエデ4㍍×76㌢やケヤキ、ホオ、クルミ、クリ、サクラ、ナラなども出品される。

開市はいずれも正午から。

問い合わせは中信木材センター（電話0263・77・2347）、北信木材センター（電話026・295・5546）まで。

能登ヒバサポーター任命

石川県木材産業振興協会

石川県木材産業振興協会（通善一洋理事長）は2月26日、「アテ林業・能登ヒバを生かした能登の創造的復興サポーター（能登ヒバサポーター）」の任命式を金沢市内で開いた。

能登ヒバサポーターは、中長期的な視点でアテ林業の持続化や能登ヒバの高付加価値化に向けたバリューチェーンの共創に加え、能登の地域情報の発信や関係人口の創出などに取り組む企業や団体などを任命する（2月17日付7面既報）。

通善理事長（右から2人目）から登録証を受け取ったサポーター

26日には、サポーターに任命された企業・団体のうち、来場した5社の代表者に通善理事長から登録証が手渡された。

今回、サポーターに任命された企業・団体は次のとおり。

▽石川県山林協会、石川県森林組合連合会、石川県木材青壮年会、オイスカ、国際観光施設協会、全国木材組合連合会、日本ウッドデザイン協会、一龍木工、加賀木材、佐藤岳利事務所、谷口、蔦屋漆器店、ナニックジャパン、フルタニランバー、フロンティアジャパン